

令和 2 年 5 月 26 日現在

機関番号：34315

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2019

課題番号：16K02864

研究課題名(和文) つながり構築するプロジェクト授業がドイツ語初学者の学習意欲に及ぼす効果の研究

研究課題名(英文) A Study on the Effect of Project Classes on the Willingness of Beginners to Learn German

研究代表者

田原 憲和 (Tahara, Norikazu)

立命館大学・法学部・准教授

研究者番号：80464593

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,400,000円

研究成果の概要(和文)：つながりをもたらすプロジェクト授業が学習意欲にどのように影響を与えるのか、その理由は何なのかについて、多面的に分析した。「外国語学習のめやす」にも提示されているように、他者を意識し、他者と積極的に交わることを志向する外国語授業は、学習者の多様な能力を発揮させるだけでなく、他者との関係構築の過程においてその学習意欲を呼び起こし、向上させ、維持していくことにつながる事が明らかになった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

この研究で示したことは、外国語教育の現場における社会とのつながりの重要性である。学習意欲の向上や維持に関する実践的な研究であり、教育現場において広く応用のできる可能性がある。ここで示したのは特に外国語教育、特にドイツ語教育についてであるが、それだけにとどまるものではなく、同様の手法を他の教科に応用することも容易である。これ大学だけではなく、中等教育機関におけるいわゆる学習困難校においても実践可能であり、社会的意義は大きい。

研究成果の概要(英文)：We conducted a multifaceted analysis of how and why PBL (project-based learning) brings about connections affects students' motivations to learn. As shown in "Measures of Foreign Language Learning", foreign language classes, should, ideally aim to be places in which students are both aware of and actively interact with others. They should also be places where learners are not only allowed to demonstrate their diverse abilities, but also where they can stimulate, improve, and maintain their motivation to learn in the process of building relationships with others.

研究分野：外国語教育

キーワード：外国語教育 ドイツ語教育 学習意欲

## 1. 研究開始当初の背景

研究開始当初、プロジェクト学習(パフォーマンス課題)に関連し、「つながる」という学習目標を組み込んだ新たな教育指針である「外国語学習のめやす」の実践に取り組む中で、こうした「つながる」ことが学習意欲向上に資することが判明しつつあった。同時に、プロジェクト授業における集合的および個人的評価が必ずしも一致しないことや、「つながる」ためのプロジェクト授業が学習者に対して自律学習を促進する効果があるということなどを明らかにしていた。

研究開始にあたっては、こうしたこれまでの知見に加え、プロジェクト授業での文法学習の効果や適切な学習奥表の設定のための方法など、新たに判明しつつあったいくつかの成果をもとに、3年間の研究を計画していた。

## 2. 研究の目的

この研究は、つながりの構築が初学者の学習意欲をどの程度まで刺激することができるのかということ明らかにするとともに、学習者個人の特性との連関を分析し、それぞれに応じたプロジェクト授業のモデルを策定することを目的とした。そのために明らかにすべきこととして、以下の4つの点を挙げていた。

- (1) 学習者個人の特性がプロジェクト授業遂行の過程で及ぼす効果や影響を分析するために、教育心理学的アプローチに基づいて作成したアンケート調査を行い、一般的なプロジェクト授業実践の際に予測される、個人的特性に起因する障害となる事項を示すとともに、実際の「つながり」構築のプロジェクト授業実施後の学習意欲の変遷との関連性を示す。
- (2) 初学者あるいは学習者個人にとっての「つながり」の位置づけを明らかにするため、プロジェクト授業の実践を通じて「つながる」対象と意欲向上・維持の関連性を明らかにする。
- (3) プロジェクト授業の経過と結果を適切に反映できる評価方法を開発するため、作業分解表と結びつけたルーブリックを開発し、一般的な評価方法と比較することでその妥当性を明らかにする。
- (4) 学習者個人の特性とクラスの位置づけ、学習意欲向上・維持に効果的な「つながり」を構築するプロジェクト授業と評価方法のモデルを開発し、実践することで、「めやす」の概念が学習意欲向上と維持に一定の効果を及ぼすことを実証する。

## 3. 研究の方法

研究計画立案時は、学習者の特性に応じたプロジェクト学習の効果の検証という部分に焦点を当てていたため、教育心理学的アプローチに基づくアンケートの作成、実施および分析を検討していた。しかしながら、こうした調査は学習者個人の精神的、心理的プレッシャーにもつながる恐れがあった。そのため、ターゲットを学習者個人ではなく、一定の特性を含むゆるやかな集合体とし、調査を進めた。調査対象となった集合体は、以下に示すとおりである。

- (1) 学習意欲に乏しい集合体(再履修クラスにおける傾向)
- (2) 学習意欲に富んだ集合体(ドイツ語副専攻クラスの最上位層における傾向)
- (3) 身体的障害を有する学習者

学習意欲に乏しい集合体については、授業開始前および最終評価確定後の記名式アンケート調査を行った。授業開始前アンケートにおいて、それぞれの学習者がどのような背景を持って再履修クラスに在籍しているのか、また、学習意欲の程度について把握することに努めた。最終評価確定後に、プロジェクト学習への取り組み姿勢や自身の学習意欲についての分析等を問い、この集合体としてどのような大きな変化が生じたのかを把握することを試みた。また、これらのアンケートはともに記名式であったため、個人の学習意欲や学習の姿勢の変遷、自己分析の変遷などについても辿ることができた。

学習意欲に富んだ集合体については、それぞれ個別に半構造型インタビューを行った。インタビューをSCATにより分析し、それぞれの学習意欲の変遷を明らかにしていった。

身体的障害を有する学習者については、過去に授業を担当したことのある学習者とのやりとりを本人の許可を得た上で改めて分析することで、こうしたプロジェクト学習を導入する上での問題点や注意点などを洗い出した。

また、このようなそれぞれの集合体(や個人)に対して「めやす」が提唱するような「つながり」をもたらすようなプロジェクト授業がどのような効果をもたらすかを明確にするため、「めやす」そのものの分析も並行して行った。加えて、ICTをプロジェクト学習に組み込むことでより効果的な実践が行えるという考えのもと、さまざまなデバイスやwebサービス、スマートフォンアプリケーションなどを併用したプロジェクト授業を行い、その効果を探った。

#### 4. 研究成果

研究期間を通じての総括的な成果物としては、田原編著『他者につながる外国語授業をめざして』があるが、その前提となる成果について順を追って挙げていく。

学習意欲の低い学習者の集団に対する研究成果としては、『e-Learning 教育研究』12号(2018年3月発行)掲載の「再履修クラスにおける復習用動画の活用と学習行動への影響 授業内学習と授業外学習をつなぐために」がある。これは、「ドイツ語再履修クラスにおける新たな試み」(言語教育エキスポ2017にて口頭発表、2017年3月)、「ドイツ語再履修クラスにおける復習用動画の活用」(e-Learning 教育学会第15回研究大会にて口頭発表、2017年3月)での研究成果を発展させたものである。ここでは、再履修クラスの学習者の学習意欲を誘発させるため、合格(単位取得)までの道筋を明示化することで、ドイツ語学習の外発的動機を喚起させた。また、早期に合格ラインに到達した学習者から順にA~Cの3つのグループに分類し、単位未習得事由や学習行動(復習用動画をどのようなタイミングで視聴していたか)などと掛け合わせながらその傾向を分析した。

学習行動については、事前学習型、復習(再確認)型、復習(思い出)型、見逃し配信型に分類したところ、A~Cのグループでそれぞれの特徴が顕著に現れた。早期に合格ラインに到達したグループAの集団は、事前学習型もしくは復習(再確認)型に、平均的な時期に合格ラインに到達したグループBの集団は復習(再確認)型、復習(思い出)型、見逃し配信型に、期限ギリギリに合格ラインに到達したグループCの集団は復習(思い出)型と見逃し配信型に偏った。アンケートの自由記述欄とも併せて分析したところ、復習用動画の存在がそれぞれのグループの学習者にとって一定の学習成果をもたらす期待価値を与えていたことも判明した。

この研究を発展させ、「LMSやデジタルデバイスを用いたドイツ語再履修クラスでの取り組み」(日本デジタル教科書学会にて口頭発表、2019年8月)という研究成果も残した。ここでは、ドイツ語再履修の学習者が他の学習者につながる活動が、学習者の行動にどのような影響をもたらしたのかを明らかにした。事後アンケートからは、クラスの雰囲気やグループワークの楽しさが学習行動に良い影響を与え、また、他者と協力することで自らの単位取得のためのルートが明示化されるということが最低限の学習意欲の維持につながったことが明らかになった。

学習意欲の高い学習者の集団に対する研究成果としては、「目標設定と気づきをもたらす学習意欲 3名のドイツ語学習者へのインタビューの質的分析の試み」(日本教育工学会研究会にて口頭発表、2019年3月)で報告した。高い学習意欲を維持したまま卒業した3名の学習者に対し個別にインタビューを行い、SCATによる分析を行った。その結果、それぞれの学習意欲は外部からは見えないところで変容していたこと、異質なもの(言語、文化、他者)への気づきや短期的な目標設定が学習意欲の向上や維持に大きく影響していたことを明らかにすることができた。また、インタビューを行った3名のうち2名に、外発的動機づけから内発的動機づけへの変容が見られた。そこに深く関わっているのは、こうしたプロジェクト授業を通じた社会とのつながり及びそこでの発見である。

身体に障害を有する学習者については、「2人の障害学生とその対応について」(外国語授業実践フォーラム第15回会合にてシンポジウム登壇、2018年3月)で報告した。ここでは、障害を有する学習者に対してどのようなつながりをもたらすことが重要かということについて議論した。当事者のプライバシーの問題や障害の程度による対応の差が著しいことから、具体的な結論を出したわけではないものの、こうした学習者においても「つながり」をもたらすことは学習の環境整備にあたり、避けては通れない部分であるという議論を行った。

こうした具体的な学習者の集合体に対する分析に加え、「めやす」そのものの分析からも新たな視点を多く獲得することができた。

「CEFRと「めやす」」(外国語授業実践フォーラム第16回会合にて齊藤公輔(研究分担者)との共同による口頭発表、2018年9月)では、「めやす」とCEFRの共通点や相違点などを抽出し、提示した。「誰のための「めやす」か」(外国語授業実践フォーラム第17回会合、2019年3月)においては、「私たちは「めやす」から何を学ぶのか」「私たちは「めやす」をどのように理解するのか」「私たちは「めやす」をどのように語るのか」「私たちは「めやす」をどのように用いるのか」という4つの疑問について解き明かした。

こうした研究成果の多くを盛り込んだのが、田原編著『他者につながる外国語授業をめざして 外国語学習のめやす』の導入と活用』(三修社、2019年4月)である。また、評価方法も含めた「めやす」の総合的な活用方法について、「外国語学習のめやす」に基づく授業設計 理念から実践へ」(韓国日語教育学会第35回国際学術大会にて口頭発表、2019年4月)においても報告した。

また、ICT活用についてはまだ研究途上の面もあるが、これまでの途中経過を随時報告している。「EDpuzzle活用法」(FLEXICTエキスポ2018にて口頭発表、2019年3月)においては、動画配信型授業におけるwebサービスであるEDpuzzleについて、どのような活用方法があるのか、どのようにすればより効果的なのかについて報告した。また、「Quizlet Liveで単語テストを盛り上げる」(FLEXICTエキスポ2019にて口頭発表、2020年2月)においては、単語テ

ストと「つながる」プロジェクト授業との組み合わせの方法について、具体例を交えながら報告した。こうした ICT の活用を通じ、社会と「つながる」プロジェクト授業がより加速化し、学習がより実践的なものになるということを明らかにしてきた。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 2件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 田原憲和	4. 巻 12
2. 論文標題 再履修クラスにおける復習用動画の活用と学習行動への影響 - 授業内学習と授業外学習をつなぐために -	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 e-Learning教育研究	6. 最初と最後の頁 13-22
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 能登慶和、寺田雄介	4. 巻 7
2. 論文標題 ドイツ語授業におけるLearning Management Systemを用いた自律学習支援の試み	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 獨協医科大学基本医学年報	6. 最初と最後の頁 73-78
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計14件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 1件）

1. 発表者名 田原憲和
2. 発表標題 「外国語学習のめやす」に基づく授業設計 - 理念から実践へ -
3. 学会等名 韓国日語教育学会第35回国際学術大会（国際学会）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 田原憲和
2. 発表標題 LMSやデジタルデバイスを用いたドイツ語再履修クラスでの取り組み
3. 学会等名 日本デジタル教科書学会 第8回年次大会（新潟大会）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 阪上彩子、田原憲和
2. 発表標題 南米における『外国語学習のめやす』研修について
3. 学会等名 第1回SNA研究会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 田原憲和
2. 発表標題 誰のための「めやす」か
3. 学会等名 外国語授業実践フォーラム第17回会合
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 田原憲和
2. 発表標題 目標設定と気づきをもたらす学習意欲 3名のドイツ語学習者へのインタビューの質的分析の試み
3. 学会等名 日本教育工学会研究会No.19-1
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 田原憲和
2. 発表標題 外国語の学びを考える教養ゼミナールにおける学び
3. 学会等名 言語教育エキスポ2019
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 田原憲和
2. 発表標題 EDpuzzle活用法
3. 学会等名 FLE x ICTエキスポ2018
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 田原憲和
2. 発表標題 2人の障害学生とその対応について
3. 学会等名 外国語授業実践フォーラム
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 齋藤公輔
2. 発表標題 “DACHL”の「いま」とドイツ語の可能性
3. 学会等名 関西大学独逸文学会第110回研究発表会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 田原憲和
2. 発表標題 ShowMe x EDpuzzle
3. 学会等名 FLExICT カンファレンス
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 田原憲和
2. 発表標題 ドイツ語再履修クラスにおける新たな試み
3. 学会等名 言語教育エキスポ2017
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 田原憲和
2. 発表標題 ドイツ語再履修クラスにおける復習用動画の活用
3. 学会等名 e-Learning教育学会 第15回研究大会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 齋藤公輔
2. 発表標題 授業支援アプリを用いたドイツ語の文法授業と学習者からの評価
3. 学会等名 e-Learning教育学会 第15回研究大会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 能登慶和
2. 発表標題 SNSを用いたドイツ語学習の可能性
3. 学会等名 第11回協働実践研究会 & 第13回外国語授業実践フォーラム（共催）
4. 発表年 2017年



〔図書〕 計1件

1. 著者名 田原憲和 (編著)	4. 発行年 2019年
2. 出版社 三修社	5. 総ページ数 360
3. 書名 他者とつながる外国語学習をめざして「外国語学習のめやす」の導入と活用	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	齊藤 公輔 (Saito Kosuke) (90532648)	中京大学・国際教養学部・准教授  (33908)	
研究分担者	能登 慶和 (Noto Yoshikazu) (00765159)	獨協医科大学・医学部・講師  (32203)	
研究協力者	池谷 尚美 (Ikeya Naomi)	横浜市立大学・非常勤講師  (22701)	
研究協力者	鈴木 冴子 (Suzuki Saeko)	埼玉県立伊奈学園高等学校・教諭	